都留文科大學報

第117号
2011年
11月24日（木）

編集　都留文科大学広報委員会

〒402-8555　山梨県都留市田原 3-8-1　都留文科大学内
☎ 0554-43-4341　URL：http://www.tsuru.ac.jp/

第 56 回 桂川祭（学長と鍋ろう）

秋季オープンキャンパス

図書館 de 読み聞かせ会

湖南師範大学との交換留学更新協定締結

特集　東日本大震災と文大（2）…… 2

津波被害資料レスキュー　日向良和講師
現地リポート　社会学科３年　大久保祐真
ボランティアセンターの発足　平林祐子准教授
文大における節電達成度、授業料等免除件数

学外研究報告 …… 6

初等教育学科教授　柳　宏
国文学科教授　新保祐司
国文学科教授　鈴木武晴
英文学科教授　西出公之

夏季休業を利用して学外で学ぶ ……10

初等教育学科教授　坂田有紀子／３年　鈴木若菜
国文学科教授　阿毛久芳／４年　髙村康大
英文学科教授　鷲　直仁／３年　西山紀子
社会学科准教授　菊池信輝／３年　金子泰郎
比較文化学科教授　大森一輝／３年　篠原双葉

教育実習を終えて ……15

初等教育学科３年　湯村佳奈美
国文学科３年　山下　薫
英文学科３年　山田　舞

講演会だより ……18

英文学科・英文学会共催春季講演会
社会学科・地域社会学会共催　前期講演会

文大だより ……20

第 38 回鶴鷹祭開催／第 56 回桂川祭開催
入学時のスクリーニングテスト実施結果
夏季オープンキャンパス報告／大名行列への参加
セント・ノーバート大学（米国）との交換留学
教員免許状更新講習／合唱団４年連続全国大会出場！
市民公開講座／現職教員教育講座
コンピューター学生指導員講座
秋季オープンキャンパス報告／台風 12 号の影響
図書館だより／前期修了者卒業式
本　ぶんだい堂／編集後記…水野光朗 ……28

特集　東日本大震災と文大（2）

東日本大震災
津波被害資料レスキュー

図書館専任講師
日向良和

『東日本大震災』ではその「津波被害」の大きさが目立っており、筆者もテレビなどで繰り返し流される津波の映像に恐怖した。10メートルを超す津波が押し寄せた岩手県陸前高田市や大槌町の図書館は写真１、２のとおりである。

そのような状況の中で、一部の資料が水没はしたものの、流されずに残っていた。

本学非常勤講師の小林是綱（ぜこう）氏は陸前高田市立図書館、大槌町立図書館の２つの図書館に残る津波被災資料について、資料の洗浄とデジタルデータ化により後世に伝えていくことを決意した。

夏休みに合わせて、学生に対し東北図書館の現状を話し、その資料の救出について声をかけたところ、多くの学生の賛同を得て、８月29日より、資料洗浄とデジタル化作業を開始した。筆者も洗浄方法、デジタル化方法の検討から実際の作業に参加した。

資料は海水没し砂などにまみれていた。現地で乾燥はおこなったが十分ではなく、現在でもかなり湿気を含んでいる。砂については塩分等により堅く固着していた。資料の洗浄は固めのブラシにて、ページを破らないように１ページごとに砂を払い落とした。砂を落とした後はA3対応スキャナやデジカメなどを使いスキャン・撮影をおこなった。取り込みと同時に画像から文字をよみとり、文字検索が可能なPDF

写真１　陸前高田市立図書館
撮影：小林是綱（本学非常勤教員）

写真３（陸前高田市立図書館資料（一部）
（撮影：小林是綱）

写真２　大槌町立図書館　（撮影：小林是綱）

写真４　刷毛・ブラシによる資料洗浄
（撮影：地域資料デジタル化研究会）

特集　東日本大震災と文大 (2)

ファイルとして保存していった。検索用文字は透明で、画像に重ねて保存されている。

8 月末から 9 月中旬までの作業により数千ページの近世・近代文書や、文集などの地域資料がデジタル化され保存された。

10 月以降も都留文科大学と笛吹市石和町の 2 カ所に分かれて作業を進めていく予定である。作業は単純な手順であり誰でもおこなうことができる。参加を希望される方は、学生、一般の方を問わず、都留文科大学日向までご連絡いただきたい。

写真 5　スキャナによるデジタル化
（撮影：地域資料デジタル化研究会）

東日本大震災津波被災資料レスキューボランティアに参加した学生の声

（寄せ書きより）

「資料のデジタル化のお手伝いをさせていただきました。山梨での作業でしたが、少しでも役に立てたらと思います…。たくさんの笑顔があることをお祈りします。」
山本

「広報のクリーニングと古文書のスキャンをお手伝いさせていただきました。1 日も早い復興をお祈りします。」　渡邊

「今回は主に広報のスキャンをお手伝いさせていただきました。復興の手助けに少しでもなれれば幸いです。」　廣瀬

「スキャン作業のお手伝いをさせていただきました。復興の手助けになれたのなら幸いです。」　木村

「資料の砂払いとスキャンをさせていただきました。少しでもお力になれれば幸いです。がんばれ陸前高田市、がんばれ大槌町！」　榊間

「デジタル化のお手伝いをさせていただきました。一日も早く復興することをねがっています。」　北村

「現地でのお手伝いはできないけれど、遠くから応援します！ 1 日も早く復興するように。」　望月

「デジタル化とクリーニング作業のお手伝いをさせていただきました。1 日も早い復興をお祈りします。」　小泉

「広報を 2 年半分スキャンしました。些細なことかもしれませんが、1 日も早い復興を願っています。」　柄澤

「記録も記憶も風化させないように、と今回の活動に参加しました。辛いことがまだまだあると思いますが、皆さんもそれぞれ一人ではありませんので。」
丸山（直）

「岩手出身で、山梨に住んでいることからお手伝いさせていただきました。今日スキャンした資料が新しい生活の助けになれば幸いです。がんばりましょう。岩手」
小田嶋

「古文書 1 冊スキャナがんばりました！ 1 日も早い復興をお祈りします。」
四十内

特集　東日本大震災と文大（2）

現地リポート

被災地ボランティア体験から学ぶこと

～学生ボランティアサークルの結成と活動～

社会学科３年　大久保祐真

「災害ボランティアチームVS（以下VS)」とは、３月11日の東日本大震災で被災した地域に行き、被災地のがれき撤去や被災者の心のケアなどの災害ボランティア活動を行う都留文科大学の学生団体である。４月に、個人で東北に行って災害ボランティア活動を行った学生でボランティア報告会を実施し、そのメンバーを中心に、もっと多くの学生がボランティア活動に参加できるようにすることを目標に、サークルとして５月にVSを結成した。現在のメインスタッフは全学科の学生20名程である。VSは現地に行っての活動を10月までに５回行い、各活動10人から25人が参加した。その受け入れ先となっているボランティアセンターは宮城県登米市の「RQ市民災害救援センター」と、NPO法人「ねおす」であり、そこで与えられた活動や独自で企画した活動などを行ってきた。

活動内容は、がれき撤去や牡蠣のいかだ作りなど地元の人の支援、こどもたちとの遊び、復興祭の手伝いなどである。私は最近の活動では他の団体と一緒にゲームラリーというものを小学校の体育館で行い、こどもたちと遊んだり一緒にごはんを食べたりした。まだまだボランティアが足りていない状況であるのでこれからも支援を続けていきたい。

参加したメンバー

ボランティアに行く中で私の中で変わったと思うことは、多くの視点でものを見ることができるようになったことだ。多くの人と知り合い、その人たちと話すことで私の見ていた視野の狭さを知った。多くの視点から物事を見ることで世界の広がりを感じた。私のほかにもボランティアに行って、将来人を支援する仕事に就きたいと思った人もいた。ボランティアといえば人を助けにいくように感じられるが、私は自分が変われる場であるように思う。だからそんなに気構えずに多くの人に積極的に参加してほしい。

今後のVSの活動は、桂川祭で被災地のかまぼこを売ることで支援するための出店や、11月、12月にボランティア活動に行くことなどがある。東日本大震災の復興はまだまだこれからなので、みんなでボランティアに行き、支援していきたいと思う。

VSに関心のある方、ご支援いただける方は大学までご連絡ください。多くのみなさんの参加をお待ちしております。

都留文科大学ボランティアセンター発足

社会学科准教授
平林祐子

東日本大震災を受けて、都留文科大学でも、震災に関連するボランティア活動への関心が高まりました。そこで、このような活動に関わる文大生の支援や情報提供などを行うため、５月末に「都留文科大学ボランティアセンター」が誕生しました。関心をもつ学生スタッフ10数人が集まり、これまでに、ブログやウェブサイトの立ち上げ、各種ボランティア活動の情報収集と紹介、被災地で使うヘルメットや長靴等の管理・貸し出し、ブログ等での活動報告等を行ってきています。今後は被災地で泥に浸かってしまった写真を洗浄して返す「写真洗浄ボランティア」を大学で行うこと等も検討しています。

特集　東日本大震災と文大 (2)

文大における節電達成度、授業料等免除件数

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災に伴い、本学でも政府の「夏期の電力需給対策の骨格」に基づき、需要面での対策を具体的に進めてきました。

東京電力管内では、７月から９月の平日９時から 20 時の間で最大使用電力を昨年比 15％抑制する目標値が設定されました。加えて、契約電力 500kw 以上の大口需要家には、電気事業法第 27 条に基づき電気の使用が制限されることとなりました。

本学は契約電力 800kw であり、大口需要家に分類されます。これまで以上の積極的な節電を進めるため、独自の目標値の設定や取り組みを検討し、学生や教職員の理解が得られる範囲で可能な限りの対策を行ないました。具体的には、前年同月値と比較して使用最大電力及び使用電力量の 20％抑制を目指し、各施設の照明を間引く、使用しない教室の照明の消灯、冷暖房機器の温度設定等の徹底を図りました。その結果、７月の使用最大電力は▲ 21.38%、使用電力量は▲ 33.27%、８月から９月はいずれも▲ 30％以上を達成することができました。昨夏の使用状況を勘案すると、７月の目標達成は厳しいと危惧していましたが、学生と教職員が一体となった取り組みが功を奏し、目標を達成することができました。

国は東京電力管内の電力の使用制限を９月９日で終了としましたが、15％の需要抑制は努力義務として残しました。本学においても冬期の電力需給がひっ迫するおそれや省エネの観点から、引き続き節電に努めます。短い準備期間で高い削減率が求められ苦慮した経緯から、今後節電を継続していくにあたり、省エネ型製品の導入の促進や使用電力量を下げる使い方等に取り組み、無理のない節電に努めていきたいと思います。

照明について
- 通路や教室等の照明を間引く（場所により 30 ～ 70%程度）
- ライトアップの禁止（本部棟屋上）
- 昼間のホール、廊下、トイレ等の照明を消灯
- 教室の蛍光灯を省エネタイプに変更
- 帰宅時の巡回消灯

ＯＡ機器・動力等
- パソコンのディスプレイの照度を 50%に設定
- ウォシュレット便座の使用禁止
- 長時間使用しないパソコンは電源停止またはスタンバイモード
- プリンターの共同利用
- エレベーターの原則使用禁止 (体調不良や荷物運搬のみ)

空調について
- 冷暖房機器の使用期間の設定 (６月～９月)
- ブラインド・カーテン等の活用
- 冷暖房機器の温度設定は、冷房：28℃を目安とする

そ の 他
- 教職員への節電の啓発
- 貸出時間の短縮
- 定時退庁日の設定
- 貸出施設の限定・集約
- クールビズの徹底

東日本大震災により修学困難となった学生への支援について

本学では被災されたことにより修学が困難になった方に対し、次の通り経済的支援を行いました。

制　度　名	震　災　区　分　（内　訳）	概　　要
授業料免除	全壊・大規模半壊・半壊・原発10キロ圏内等	全額免除　24件
	一部損壊	半額免除　22件
	失業・収入激減	全額免除　3件、半額免除　9件
入学金免除	大規模半壊・半壊・床上浸水・一部損壊	全額免除　17件
特別奨学金給付	全壊・大規模半壊・半壊・原発10キロ圏内等	月額5万円を1年間給付（60万円）　15件

学外研究報告

WORLD GYMNAESTRADA

初等教育学科教授　柳　宏

今回の半年間の研究活動には青山学院大学研究員としての活動と、14TH WORLD GYMNAESTRADA での作品発表とがあります。

青山学院大学のカリキュラムには「青山スタンダード」という考え方があります。それまでの教養教育を抜本的に改革し、教養教育と専門教育のつながりを密接にしたもので、青山学院大学の卒業生であれば、どの学部・学科を卒業したかに関わりなく、一定の水準の技能・能力と一定の範囲の知識・教養をそなえているという社会的評価を受けることを目指しています。私はその中の「身体の技能領域」の研究員として、若手研究者と共に運動学習に関して研究を行いました。「身体の技能」の学習成果目標は、医学的な見地から見た健康科学・保健体育の諸問題を自己とのかかわりで理解し、各種スポーツの運動能力や身体技法の修得を通じて、主体的な身体表現の技法を獲得することにあります。これまで多くの大学体育授業で行われていたスポーツ技能の修得にとどまらず、自己実現、自己表現、世界および自己認識にかかわる身体技法を修得することを目標としています。今回得たこの考え方は、今後の本学体育科目の改革・改編に大変参考になると考えます。また、青山学院大学には多くのトップアスリートが居ます。学生競技スポーツのあり方について得ることが多々ありました。

WORLD GYMNAESTRADA は４年ごとにヨーロッパを中心に開催される大会で、今回で 14 回を数えました。7 月 10 日～ 16 日の一週間、スイス・ローザンヌで開催され、世界 54 の国や地域から 253 のチームが参加があり、日本からは 14 チームが参加しました。私はモダントレーニンググループでたった一人の男性メンバーとして作品発表を行ってきました。大会に向け、４月からの毎週末には作品練習を行っていたのですが、我がチームの平均年齢は 60 歳近くと高齢で、故障者の多い厳しい練習となってしまいました。しかし、大会本番では練習の成果を十二分に発揮し、観客からは大喝采を受け、世界の体操家達からは、高い評価を受けることができました。

14TH WORD GYMNAESTRADA IN LAUSANNE
モダントレーニンググループ

他チームの作品の傾向をみると、アクロ体操（アクロバット的な動きや小さな子どもを高々と上に差し上げたりする体操）が多くなったと感じました。勿論伝統的な体操も数多く見られました。マルモガールズ（スウェーデン）の美しいボール運動、スイスのお年寄りが 15 分間途切れることなく動き続ける作品、イギリスのダウン症の子どもの作品、そして圧巻は南アフリカの子ども達の圧倒的パワーの作品等々です。生涯スポーツ種目としての体操の方向性を考える良い機会となりました。

最後になりましたが、未曾有の大震災に会われた方々にお見舞いを申し上げると共に、復興に向けて微力ながら一緒に頑張ることをお約束いたします。

頑張ろう　日本！

学外研究報告

ヴェネツィアで暮らした半年間

国文学科教授　新保祐司

平成23年度の前期、学外研究の機会を与えて頂きました。この貴重な時間を活かすために私は、イタリア国立カ・フォスカリ大学の客員教授としてヴェネツィアに滞在しました。カ・フォスカリとは、フォスカリ家の館という意味で、大学の本部が、この1400年代のヴェネツィアのゴシック様式を代表する建物にあることから、このように名づけられています。

この大学の東アジア学科に所属して、アルド・トリーニ教授の指導を受け、また特別講義を行いました。その講義は「小林秀雄と近代批評」と題し、日本文学を専攻しているイタリア人の大学生に向けたものでした。

トリーニ先生は、日本語学の世界的に著名な学者で、禅などの日本思想にも造詣が深く、今、道元の『正法眼蔵』をイタリア語に翻訳しつつあるとのことでした。このトリーニ先生を紹介してくれたのが、今年の3月に亡くなられた樋渡登先生で、先生は体調がよろしければ、この夏休みにヴェネツィアに来られるはずでした。そして、トリーニ先生や私と日本語学を初めとしてさまざまなことがらをヴェネツィアの運河や古い建物を眺めながら語り合うのを楽しみにされていました。それが、惜しくも亡くなられ、この夢もかなわぬこととなりました。とても残念でなりません。

トリーニ先生はまた、シドッチの研究家としても立派な業績を持たれています。シドッチは、1708年、鎖国下の日本にやってきたイタリア人の宣教師です。いうまでもなく、捕えられ、江戸の小石川にあった切支丹屋敷に幽囚の身となりました。そこで、時の学者政治家として著名な新井白石がシドッチを尋問し、そのやりとりを白石は『西洋紀聞』として書き残しました。

このシドッチについてトリーニ先生の指導の下、研究しました。白石から見たシドッチはいろいろ考察されていますが、肝心のシドッチという宣教師がどのような人物であるかということはあまり問題とされていないからです。しかし、シドッチという人物そのものを知ることは、白石（あるいは、江戸の日本）を相対化するのに必要なことです。というのは、この白石の著作は、日本人が基督教をどのように理解するか（あるいは、理解しないか）を典型的に示しているものでもあるからです。

日本人と基督教、このテーマは近代日本を考えるときに内村鑑三を中心に置いている私にとって重要なもので、今回、イタリアというカソリックがしみ込んだような風土に半年間、暮らしたことは、得るものが多かったと思います。内村は今年、生誕150年を迎えます。ヴェネツィアでの考察の一端は、私が編集責任者となって生誕150年を記念して刊行される雑誌「環・別冊　特集内村鑑三」（藤原書店刊）に反映されます。

このような成果を産む時間を与えて頂いたことに感謝するとともに、今後の教育研究に活かしていく所存です。

よく散歩したザッテレの岸にて

学外研究報告

点字万葉集の試み

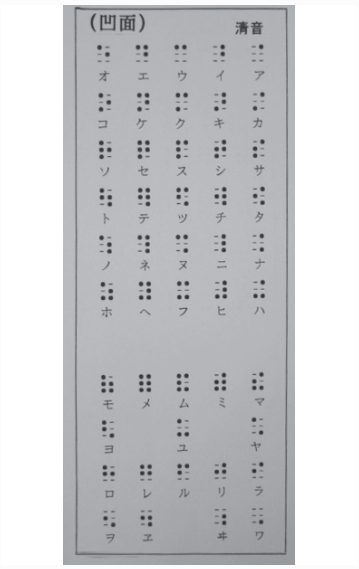
国文学科教授　鈴木武晴

きんもくせいの妙（たえ）なる香りがただよい始めた10月１日、半年間の学外研究から帰任致しました。学外研究中は、盲人福祉センター山梨ライトハウス点字図書館内の山梨青い鳥奉仕団の理事長と団員の皆様にたいへんお世話になりました。ここに記して感謝申し上げます。

山梨県障害者文化展

私は、山梨県視覚障害者福祉協会からの依頼で、毎年の秋11月に山梨県ボランティアセンターで開催される「県下視覚障害者文化祭」における短歌の部の優秀作品の選考と選評を行っています。また、かつて上記山梨青い鳥奉仕団の講演会講師として招かれ、「生きる力の万葉集」という演題で講演したこともあります。山梨青い鳥奉仕団の理事長は、３月11日の東日本大震災で仙台に住む妹さんご一家を亡くされた深い悲しみに負けず、盲人福祉の向上に日々ご尽力されている尊敬すべきかたです。また、歌人としてもご活躍されています。以上のようなご縁によって、私は山梨青い鳥奉仕団の研究員という身分で、専門とする万葉集の点字本の作成を目的として学外研究を行わせていただきました。盲人福祉に関する行事にも参加させていただきました。

点字は、フランスのルイ・ブライユ（1809～1852）が16歳の年の1825年に考案したものです。それを基に明治23（1890）年11月１日に、東京盲唖学校の教員石川倉次が日本語の点字を作成しました。現在、11月１日は「日本点字制定記念日」となっています。



点字表（部分）

現代社会の中で点字は、駅の券売機やエレベーター、飲食品の容器などに用いられていますが、まだ不十分といえます。視覚障害者の教養を深める点字図書や本の音訳テープの作成等は、ボランティアの人々の手によって行われているのが現状です。こうした中で、千年以上を生き続けて人々に生きる力を与えてきた万葉集の、その点字本の作成は重要な任務の一つと私は考えています。その作成は緒（ちょ）についたばかりですが、今後も作業を進めてゆき、私独自の万葉集の点字本を完成させ、点字図書館に寄贈したいと思っています。

今年も11月に山梨県視覚障害者の文化祭が開かれます。今年はどのような短歌と出会うことができるか、たいへん楽しみにしています。

（2011年10月11日記）

学外研究報告

半年間の自宅研修

英文学科教授　西出公之

４月から半年間の学外研究を頂戴しました。自由な時間をいただき、まことにありがとうございました。当初は、１か月ほどはニュージーランドの辞書について調べることを考えていたのですが、体調のこともあって計画を変更し、海外へ出ることなく、自宅で研修させていただきました。５月下旬にはニューオーリンズへの私的な旅行も予定していたのですが、中止しました。キャンセルで戻ってきた旅行代金はある団体に震災支援として寄付しました。自宅研修の主な内容は、語彙習得についての調査、チョーサーのフレイジオロジー、私が担当している「英文法」で使っているプリントの改訂の三つでした。いずれもパソコンを使っての作業でした。

パソコンはXPを愛用していたのですが、ダウンしてしまい、やむを得ず新機種を入れました。私にとっては何台目のパソコンになるのか。遅まきながらWindows7です。私がコンピュータというものに触れたのは、1980年、米国留学中のことです。遊び半分でNumber Theory in Computerという夏季講座を取ったときが最初でした。通常の教室で説明を受けた後は各自で大学のそこかしこにある端末機で素数を見つけ出すプログラムなどをBASICで組むというものでした。帰国したら、「FM８」という８ビットのパソコンが富士通から発売になりました。ドットプリンターでは見栄えが悪いので、オリベッティの電動タイプライターを接続してワープロとして使ったり、原始的なKWICのプログラムを作ってもらって、語数調べをしたりしていましたが、容量が小さく、一度に処理できるのは3,000語ぐらい。文字列処理は難しいわけではないものの、3000語を処理して記憶させ、次の3000語を処理して、前の結果と合わせて処理するということを繰り返していくのが難しかったわけです。

そんな時代を経てきた者にとっては、まず容量について心配する必要がない、パソコンが安い、KWICや連語を抽出してくれるN-gramやCluster Wordsなど使い勝手の良いプログラムがフリーウェアとして提供されているなどというのは、夢のような世界です。今回のチョーサーのフレイジオロジーの研究では、これらのフリーウェアも活用させてもらいましたが、エクセル上で単語をばらして一つずつのセルに入れ、フィルター機能を活用しながら調べていくという方法を取りました。行単位を保持しつつも一語一語にも目を配れるわけです。この研究は「チョーサーの韻文における行頭のandをめぐるフレイジオロジー」という論文になる予定です。

私が授業で使っている「英文法」のプリントは、小さな改訂を加えつつ数年を経ました。どうしても量が増え、重複も気になっていました。今回、かなり大きな改訂をすることができ、すっきりさせることができました。学外期間中ではありましたが、「英文法」については授業をしておりました。というわけで月曜日は毎週大学に来ていたわけです。その過程でカリキュラム改訂が進行しつつあることを聞き知り、これまでにも提案してきた「ビジネス英語」の開設に向けて、他大学の状況についてネット上で調査をしたりもしました。学外研究が明けて最初の学科会議で提案させてもらいましたが、賛同を得ることができました。新カリでは「ビジネス英語」が登場するはずです。

私の自宅研修では、どうしてもパソコンに向かうということになりがちで、腰痛と眼精疲労（老眼）との戦いでもありました。年齢を考えれば至極当然のことでもあります。定年退職まで、確か、後５年半。できるだけ頑張らせていただきます。

学外で学ぶ　夏季休業を利用して学外で学ぶ

自然探求
― 富士下山実習 ―

初等教育学科教授
坂田有紀子

初等教育学科の自然環境科学系では、毎年「自然探求」という科目で、富士山の動植物の生態を学ぶ野外実習をおこなっています。この実習では登山はしません。５合目までバスで上がって、下りながら富士山の植物や動物の観察や調査をおこなうため、学生の間では「富士下山実習」という名前で呼ばれています。今年は総勢13人で７月28日と29日の１泊２日、「富士下山実習」をおこなってきました。

登山とは違う感動

初等教育学科３年　鈴木若菜

その日、私は物心ついて初めて富士山に登った。

静岡県静岡市に生まれ、家の窓から、道の空から、そして学校から、常に青く雄大な富士山に見守られて育ってきた。

そして親許を離れて山梨県。大学から直接彼の山を望むことはなくとも、凛とした空気と切るような風に富士山を感じることは簡単だった。

そんなにも富士山の近くに住んでいたのに、登ったことがあるのはほんの２、３回程度。しかもほとんど覚えていないのだから登っていないも同じである。だから本当にこの授業が楽しみで、まるで遠足前の子どものように前の晩眠れないでいた私だった。

残念ながら一日目、二日目共にあいにくの雨模様。

それでも五合目のバス停留所はごった返していた。見上げれば赤茶色の大地を剥き出しにした富士がそこにある。

私がいつも遠くから見ていた、青く美しい富士山はなく、新緑の木々と赤く不毛なスコリア大地のコントラストが雄々しくもどこか冷たい。

富士山での野外実習

一日目は五合目をぐるっと回るようなコース。二日目はそこから三合目まで下りながら動植物を観察していくコースだった。

歩きながら様々な動植物の話を聞いてはメモをとる。ほんの小さな植物にも聞けば聞くほどのドラマがあり、米粒のような昆虫にも厳しい環境の中で生きるための工夫があった。

私は、富士山という不毛の大地に生きる彼らに敬慕を感じ、同時にとても愛おしく思えた。

足元に咲く小さな花に、胸を張るように伸びる木々に私が生きてきた年月以上のドラマが必ずあるのだった。ほんの数センチの幼木が私と同い年と知ったときの感動は計り知れない。友人たちの影で何度こっそり涙したか分からなかった。

この授業で私は、高みに到達することだけが富士山の楽しみ方ではないことをひしひしと感じた。山に生き、途方もない年月をかけて形作られる自然を感じ、驚嘆し、学ぶこと。

頂上にたどり着くこととは違う感動だが、間違いなくそれに匹敵する感動だ。

多くを学びとることが出来たひと夏の経験だった。

学外で学ぶ　夏季休業を利用して学外で学ぶ

江戸・東京の風景

国文学科教授
阿毛久芳

今回牛山恵先生とともに引率した「日本文化史演習」の旅は、隅田川、国技館を間近にした両国のホテルを拠点としました。現地に立って見ること、その時、その場の歴史と文学上の意味について思いをはせるものを持っていたい、という希望をオリエンテーションで伝えました。参加した学生がそれぞれ調べ、一日のプランを立て、私がアドバイスをしました。歩行を通して江戸・東京の風景を体に刻みつけた、そんな旅だったと思います。学生の真摯な行動に感動しました。

日本文化史演習で学んだこと
—江戸・東京文学散歩

国文学科４年　髙村康大

震災から半年経った 2011 年 9 月 11 日から 15 日までの五日間、私は日本文学史演習に参加し、東京を文学散歩という形でめぐりました。前日までの雨模様がうそのように晴れ、強い日差しの下、毎日半袖姿にタオルやハンカチを持ち、汗を拭き拭き散策しました。実家を離れ、山梨に下宿してから何度となく、東京方面に遊びに行くことはありましたが、こうした江戸・東京の文化・文学にふれる機会はほとんどありませんでした。自分たちで事前調査をし、実際に文学作品の舞台や文人たちの旧居跡を訪れることで、「座学と実地体験との繋がりがここにある」と感じ、とても充実した五日間となりました。ここでは、一日一日の散策行程を振り返りながら、印象に強く残ったことを紹介したいと思います。

一日目は両国・浅草を回りました。江戸東京博物館では、江戸の町人たちの生活や、明治大正の文化、戦時中から戦後に至るまで、江戸・東京全体の風俗を肌で感じることができ、全日程を通してのイメージが膨らみました。浅草では、当時文人たちが通ったという風流お好み焼屋染太郎で夕食をとり、鉄板の熱気が立ち上る中、団扇であおぎながらアツアツのお好み焼きを頬張りました。二日目の皇居参観では、正月一般参賀に天皇御一家がお立ちになる宮殿や、二重橋、山下通りの桜並木や蓮池堀を見学し、広場から宮殿のバルコニーまでの距離と高さがテレビで見る感じより近く、驚きました。

三日目は本郷・谷中界隈に暮らした文人たちの旧居を巡りました。当時の面影を色濃く残すもの、奥まった所に区碑のみがぽつんと立っているものなど様々で、普段歩くだけでは見逃してしまうような所がたくさんありました。四日目のコースだった六本木周辺は、見渡す限りに高層ビルが立ち並び、志賀直哉や永井荷風の旧居跡の碑を見ても、そこに当時の雰囲気を感じることはできません。夜は新橋演舞場で歌舞伎を鑑賞しました。中でも「石川五右衛門」の演目で、市川染五郎の宙乗りつづら抜けの大仕掛けは圧巻でした。最終日、上野の東京国立博物館の特別展「空海と密教美術」を参観。弘法大師空海の書や、真言密教の仏像群を間近に見ることができました。文人著名人たちの宴席の会場となった老舗西洋料理店精養軒で昼食をとり、五日間の全日程が終了しました。

今回の文化史演習によって東京を身近に感じると同時に、ひとつ気づいたことがあります。それは「東京は今まで二度大きく破壊されている」ということです。（—さらに東京オリンピックに向けての建設ラッシュを加えてもいいかもしれません。）二度とは大正の関東大震災と昭和の東京大空襲ですが、厖大な人命が失われるとともに多くの文化遺産も損傷、焼失しました。写真や映像で見る凄惨な光景は、東日本大震災を思い起こさせます。今回の震災でもやはり多くの文化財が被害を受けています。この旅で巡った様々な文化財は、たくさんの人の努力によって守られてきたのだと気付かされました。それらをどうやって後世に残していくか、それはこれからを生きる私たちの課題なのだと思います。

今回の旅で、今まで知らなかった景色～過去と現在を二重写しに見るような～にふれる体験をしました。演習に参加したことを感謝すると共に、これから実地にふれる大切さを生かしたいと思います。

写しているのが私です。
猫が見えますか？

学外で学ぶ

夏季休業を利用して学外で学ぶ

英語圏で異文化学ぶ

英文学科教授
鷲　直仁

夏休みを利用して海外で学ぶ、都留の学生も数多くいます。カナダ、オーストラリア、イギリス、ニュージーランドやアジア各国などです。外国に滞在すると苦労も多いのですが、それぞれの国の様々な考え方を知り、吸収して帰国しました。

Ourselves To Know

英文学科３年　西山紀子

私は今回の夏休みを利用して、カナダのウィニペグという町で一ヶ月間語学学校に通ってきました。日本を離れて英語漬けの生活をしてみたいと思っていた私にとって、日本人の少ないウィニペグは英語学習に最適な街でした。語学学校では、南米、ヨーロッパ、アジア等様々な国の人々と知り合う事が出来ました。ネイティブの人との会話はもちろんのこと、お互いに英語を学習する身である友人たちとの会話も、私にとってはとても有意義な体験でした。学校の授業だけでなく、友人達と過ごす放課後の時間、ホストファミリーと過ごす時間、一人で買い物を楽しむ時間、ウィニペグでの生活一秒一秒の全てが学びの機会であったと感じています。

スケッチナイトにて

また絵を描く事が好きな私は、学校の近くにあったアートギャラリーで週２回のスケッチナイトに参加していました。毎回本物の裸のモデルを目の前にスケッチをするので、初めてギャラリーを訪れた時は唖然としてしまいました。最初は緊張して誰にも話しかける事が出来ませんでしたが、次第にギャラリーの仲間とも親しくなる事ができ、そこでの経験は（いろんな意味で）一生忘れられない思い出になりました。特技や趣味など、英語以外でも自分を表現できる何かがあれば、言葉を交わさずしても自分なりの方法で海外の人々とのコミュニケーンションを楽しむ事が出来ると思います。

あまりにも楽しい時間を過ごしたので、帰国してからの日本での生活をなんだか物足りないと感じてしまう事は正直あります。しかしながら、これまで自分が大学や普段の生活の中で学んできたものがあったからこそ、今回の留学を有意義に過ごす事が出来たのだと私は強く感じています。日本でも世界のどこにいようとも時の流れる速さは変わりません。その日一日の価値を決めるのは自分の行動次第です。次にまたウィニペグを訪れる際には、もっともっと魅力的になった自分で皆に会いに行きたいです。その日の為にも、残された大学生活一日一日をこれまで以上に大切に過ごしていこうと思います。今自分が居る環境の大切さを実感する事が出来たウィニペグでの一ヶ月でした。

語学学校にて

学外で学ぶ　夏季休業を利用して学外で学ぶ

足で稼ごう

社会学科准教授
菊池信輝

現代史をやる人は足で稼げ、と良く言われます。私も若い頃は多摩川の河口から源流まで市民団体の人たちと踏破してみたり、下町資料館その他の資料館をハシゴしてみたり、大宅壮一文庫に缶詰になったりしたものでした（最近はデジタル・カメラの使用が許可されるようになった国立公文書館がお気に入りです）。

金子君もどうやらそういった世界への第一歩を踏み出したようですが・・・。この世界、深いのでお気を付けて。

「山手線を歩いて一周する」

社会学科３年　金子泰郎

私は夏季休業中に「山手線一周を徒歩で回る」ことに挑戦しました。この挑戦のきっかけは、ある講義の選択課題なのですが、子どもの頃から東京を見て回りたいと考えていたので、これは非常に良い機会であると思いました。

山手線は一周 34.5 キロ、駅数 29 駅であり、電車での所要時間は約一時間です。私は渋谷をスタート地点とし、「内回り (渋谷→品川→東京→上野→池袋→新宿→渋谷)」のルートで山手線一周を目指しました。

歩いてみて気付いたことは、南西区域 (渋谷～品川間) では目黒川沿いに山手線があり、非常に長い下り坂であることや、建物が都心ほど密集していないため落ち着いた雰囲気であることでした。南東区域 (品川～新橋間) では、海沿いの平坦な道路が続き、高層ビルや大手企業の本社が数多く立ち並んでいました。東区域 (新橋～上野間) では、仕事の街、下町といった印象で、高架下の居酒屋が特徴的であると感じました。北区域 (上野～池袋) では、各駅の規模が小さくなり、住宅地や霊園が増え、山手線内にもこういった地域があることに驚きました。西区域 (池袋～渋谷間) では、都庁所在地周辺ということもあり、高層ビル群が密集していたり、人通りや交通量が増えたりと、やはり都会であると感じました。

今回要した時間は 12 時間で、各駅間は徒歩で大体 15 ～ 20 分であることが判りました。また東京は、高層ビルの多い都会という印象でしたが、今回の挑戦で数駅歩くだけで全く違った街並が現れることに驚きました。山手線全体を概観出来たことや徒歩ならではの新たな発見も多々あり、子どもの頃からの夢も実現したので、とても充実した経験になったと思います。こういった特別な経験が出来るのも大学生の間だけだと思うので、来年も長い夏季休業を利用して、何かに挑戦できれば良いなと考えています。そして、また山手線一周にも挑戦し、今度は内側の地域も歩いてみたいと思います。

スタート時のハチ公

学外で学ぶ　夏季休業を利用して学外で学ぶ

「アウシュビッツに行く」ということ

比較文化学科教授
大森一輝

今年度の「フィールドワーク（比較文化）Ⅱ」の引率補助として、ホロコーストの傷跡を巡りながら考えたのは、「自分の目で見る」ことの大切さと同時に、その難しさです。

かつてゲットーにされたチェコのテレジンの街並みは一見すると「美しく」、アウシュビッツとビルケナウは（語弊を承知で言えば）奇妙に「のどか」で、プラハ（チェコ）・クラクフ（ポーランド）・ウィーン（オーストリア）の旧ユダヤ人街はいずれも「静謐」な佇まいであり、そこに溢れていたはずの嘆き・悲しみ・苦しみ・痛みの声を「聞き取る」ことは容易ではありません。

たしかに、アウシュビッツのガス室や遺品は圧倒的な存在感で見る者に迫ってきます。しかし、それらが「語りかけて」くることを受けとめ「消化」し「血肉化」するためには、その場から消え、もはや「見えなく」なってしまったことを思い起こす想像力と、それを支える知識が必要だということを痛感しました。

「見ればわかる」という素朴な体験至上主義で満足するのではなく、「見てもわからなかった」ことのほうを大事にしながら、この歴史に粘り強く向き合い続けていきたいと思います。簡単に「わかった」気になることこそが、この蛮行を風化させ新たな愚行を招くのだと肝に銘じながら。

「労働すれば自由になれる」と書かれたアウシュビッツの門

フィールドワークを通して学んだこと
―平和学習とは

比較文化学科３年　篠原双葉

私は、2011年９月15日から22日まで、伊香俊哉先生と大森一輝先生引率のもと、チェコ・ポーランド・オーストリアの３か国を巡るフィールドワークに参加してきました。人生で初めてヨーロッパに行くということもあり、出発前からとてもわくわくしていました。今回のフィールドワークの目的は、第二次世界大戦時にナチスドイツが作り上げた強制収容所、アウシュビッツを見学し、平和について考えることでした。アウシュビッツの見学をしたのは、４日目の18日のことです。この日は、朝の８時ごろにホテルを出発し、現地ガイドの中谷剛さんの案内のもと、一日かけてアウシュビッツを見学しました。アウシュビッツは現在博物館となっており、当時の写真のパネルや書類などの展示のほか、ガス室や焼却炉を見ることもできました。展示の量が多く、またそのどれもが貴重な資料であることから、中谷さんの話を注意深く聞き、時には写真を撮るなどして、当時の様子を想像しました。午後は、アウシュビッツのすぐ近くにある、ビルケナウ第二収容所に向かい、当時、収容所に連れてこられた人々がどのような扱いをうけていたのか、について説明を聞きました。ビルケナウには、囚人輸送に使われていた列車や、トイレ、バラックなどが残されていました。当時使われていたガス室は、ナチスドイツによって爆破され、瓦礫しか残っていませんでしたが、ガス室の跡地にユダヤ人の学生の集団が追悼のために来ていたことが印象的でした。ビルケナウ見学の後、ホロコーストを生き抜き、アウシュビッツ博物館の館長も勤めた、カジミェシ・スモーレンさんのお話を聞きました。スモーレンさんは、参加者である私たちの質問に、一つひとつ丁寧に答えてくださり、そのお話はとても生々しく感じられました。この一日を通して学んだことは、とても濃密で、簡単には言い表すことができません。ただ、平和学習とは、単に歴史をたどるのではなく、見聞きしたことから考えなければならない、ということを強く感じました。

８日間のFWは、私にとって初めてのヨーロッパということも含めて、本当に貴重な体験となりました。アウシュビッツ見学以外にも、各国でユダヤ人にゆかりのある場所を見学したり、美術館やお城に行き、ヨーロッパの歴史を学んだりもしました。そして、最も強く感じたことは、歴史を後世に残していくことの重要性でした。ホロコーストはとても悲惨な歴史ですが、それを忘れないための努力が現在の私たちには必要であり、それこそが平和につながる大きな一歩である、と感じました。今後、事後学習を通して、平和学習とは何か、それは現在にどのように活かしていくべきなのかを考えていきたいと思います。

教育実習報告

教育実習を終えて

初等教育学科３年　湯村佳奈美

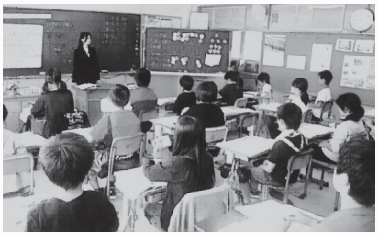
私は９月１日から約１ヶ月間、母校である宮城県の小学校で実習を行わせていただきました。実習前は、実習の具体的な流れを想像できないことが不安だったり、先生として児童と関わらなければいけないのだという思いがプレッシャーになったりし、とても緊張していました。しかし、実習が始まってしまうとそんな不安はいつの間にかなくなり、自分が目指している教師という職業の現場にいる喜びを感じるとともに、その場その場でやらなければいけないことに追われ、気づくと１日が終わっているという状態でした。

実習７日目に、初めての実践授業を行わせていただきました。教科は国語で、詩の単元でしたが、自分の立てる授業計画がいかに児童の存在を無視したものかということを思い知りました。自分が伝えたいことばかりを詰め込んだ第一回目の授業は言うまでもなく失敗に終わり、私の苦い思い出となりましたが、45分の短さ、小学生の目線で考える力の大切さなどを痛感した、とても気づきの多いものとなりました。

実習期間は、自分の仕事の遅さ、無知さ、「先生」として頼りにされることへの自信の無さなどを感じ、落ち込むことがたくさんありました。しかし、どんなに未熟な私でも子どもたちは真っ直ぐな瞳で受け入れてくれました。そのおかげで、「先生」という視点から見たときの自分の未熟さを悲観するのではなく、「先生ではない私」ならではの立ち位置で子どもと関わり、今できることを全力でやろうという前向きな考え方ができるようになりました。どんなに体力的に疲れても、子どもたちの顔を思い浮かべれば教材研究も、指導案作りも苦ではありませんでした。子どもたちと関われば関わるほど、子どもたちの「分かった」という表情を見たいという思いは強くなりました。そして、そのために子どもたちに一番合った展開や例の示し方を試行錯誤するのは指導者にとってごく自然な取り組みであること、つまり教師というのは子どもたちがいるからパワーが湧いてくるのだということを実感しました。また、よい授業にするには、クラスの雰囲気や子どもの実態を把握し、子どもの興味や認識と一致した例を示すことが大切ということを、実習をおこなって体感しました。考えてみれば当然のことなのですが、私は『年齢が近い＝感覚も近いはずだ』と思い込み、わざわざ例を考えておかなくてもその場で自然に思い浮かぶだろうと思ってしまっていたので、実際に子どもたちと接し、大学生である自分と子どもたちとの予想以上の感覚のズレを知って初めて、同じ目線に立って物事を考える難しさに気が付いたのです。子どもの目線で物事を考える難しさ以外にも、教壇に立つと普段の個人的な関わりの中ではできていること（自然なコミュニケーションなど）ができなくなってしまうことや、準備していない力は発揮できないことなども実感しました。

児童は、素直で無邪気なあまり、相手を傷つけるようなことを言ってしまう場面もありました。友達とぶつかりあったり、先生に指導されたりしながら、人との関わり方を学んでいるところなのだと感じる毎日でした。子ども自身の力を伸ばし、学びを深めるために、自分はどのように関わればよいかということを何度も考えました。自分の発言の責任の重さを感じるあまり何も言えなくなってしまったり、一人一人の成長過程を大切にするために言葉を飲み込んだりしたこともありました。学校で起こる何もかもが生活指導と直結する小学校教育の難しさ、響きやすい子どもだからこそ大人の振る舞いが大切だということを肌で感じましたし、一人ひとり違った感じ方をする子どもたちと関わる中で自分も一緒に課題に向かい、共に考え、新たな考え方を得、成長できることに感動しました。

私にとって教育実習は、教師になりたいという思いを強めてくれた、失敗・学び・感動の多い充実したものとなりました。この感情の激動を、今後の学校生活や夢の実現のために努力する力に変えていきたいと思います。



５年生　研究授業（算数）

教育実習報告

子どもから学ぶ

国文学科３年　山下　薫

４週間の実習期間は本当にあっという間でした。最初は４週間やり通せるか不安でしたが、２週目を過ぎてから加速度的に１日１日が過ぎ去っていきました。もっともっと学びたい、もっともっと生徒たちとふれあいたいと思い、涙を流した最終日の切ない気持ちを今でも忘れられません。

実習直前の打ち合わせの日、担当してくださる先生と初めて顔を合わせました。授業の進度や私が授業する教材など一通り説明を受けた後、担当クラスの名簿を見せていただきました。名前の読み方やクラスの様子をメモしている時、「来週の今頃にはもう対面してるんだなあ」と思うと、不思議な気分でした。カタカナで書いた28名の名前と顔が一致するようになるまで、１週間かかりました。9月12日、実習初日、不安と期待を胸に抱いて１年５組の教室に足を踏み入れました。ガヤガヤしていたクラスの空気が一瞬にして変わりました。それから自分が何を言ったのかよく覚えていません。通り一遍の挨拶をするだけで精一杯でした。

実習が始まって2､3日経ってから、徐々に任される仕事が増えていきました。ホームルームや生活ノートのコメント書きさえも、慣れないうちは大変でした。先生からの事務連絡の後４、５分余るのですが、なかなか「いい話」が思いつかず、「1限目の授業の準備をしましょう」と言って終わらせてしまったことが何度もありました。

そうこうしているうちに、初めての授業日を迎えました。それまで教室の後ろの方で授業を参観するばかりだったので、教壇に立った時の緊張感に気圧されそうになりました。初日の挨拶の時とは異なる雰囲気の中「私は今、先生として見られているのだ」と感じました。１回目の授業を終えた時、のどがカラカラになっていて、自分がいかに緊張していたのか気づきました。授業の後、担当の先生と反省会をしました。反省会は各授業毎にしていただくのですが、本当に多くのことに気づかされました。その中でも、「生徒の事実から学ぶ」という言葉が心に残りました。授業中、生徒の動きが止まる瞬間が何度もあったのですが、最初、私には原因が全く分からず、どうすれば良かったのか考えても答えが出ませんでした。先生は、「教える側が目的やねらいを理解してない指示や発問を出したら、子どもたちが分かるわけがない。生徒の動きが滞った時、自分の言動を振り返り原因を考えることが大切だ」と教えてくださいました。何となく指示や発問をしていた自分の愚かさに気づき、生徒の反応から常に学び続けようとする姿勢が教師の絶対要件なのだと強く肝に銘じました。

たった４週間でしたが、私にとってかけがえのない時間でした。教壇に立ち、生徒と共に熱い授業を繰り広げる自分の姿を夢に、これからの大学生活を有意義に過ごしていきます。

実習生とのお別れ会

教育実習報告

教育実習を終えて

英文学科３年　山田　舞

８月から９月にかけて母校の中学校で４週間の教育実習をさせていただきました。実習に行く前は、英語を教える事や生徒と仲良くできるかなど、とても不安な気持ちでいっぱいでした。しかし、熱心に指導を行ってくださった先生方や元気いっぱいの子どもたち、同じ時期にいた実習生に支えられながら無事に４週間を終える事が出来ました。

初日はとても緊張し全校集会での挨拶を終え、担当のクラスでの紹介という流れでしたが生徒に受け入れてもらえるかとても不安に思っていました。私も緊張していましたが、生徒も緊張しているのが少し伝わってきたような気がしました。しかし、素直な子どもたちばかりだったので安心しました。

初めての中学生に教えるという現場での授業では、今まで大学の授業の中では１人で１時間分の模擬授業を行ったことのなかったので私にできるのかなという気持ちや不安でいっぱいでした。私が授業を行う頃には中学校の学校祭の時期ということもあり45分授業だったのですが、１時間分の授業はあっという間に終わってしまったように感じました。しかし、あっという間に終わってしまった授業の中にも、生徒に授業の内容をわかりやすく教える工夫をたくさん組み込まなければいけないのだなと感じ、教える事は簡単なことではないと改めて思いました。

授業は、指導の先生の授業を参考にして同じような流れで授業を行っていましたが、指摘された点には、板書の仕方、提示・説明の仕方などたくさんありました。私は主に授業では､ピクチャーカード、ペアワーク・グループワークなどのアクティビティーを中心に行っていましたが、提示１つにしても生徒の興味や関心が違うのだなというのを毎回感じるものでした。私は完璧な授業を目指すのではなく生徒が楽しんで分かりやすく受けることのできる授業を目指して授業準備を行いました。

研究授業では、単元の重要な文法を踏まえて前回の授業で生徒にペアでつくってもらった文を担当のクラスの１年生に発表してもらうというものでした。研究授業の指導案作りはとても難しく大変なもので授業も成功とは言えませんが、生徒の発表を見て単元を通して教えてきた重要な文法を理解できている生徒ばかりだったので、今までの授業を頑張ってきてよかったなと思うものでした。

すべて楽しかった教育実習とは言えず、辛いこともたくさんありましたが、最終日に生徒からもらったメッセージなどを見て頑張って乗り越えてきてよかったと思うことが出来ました。今回教育実習で学んだことを活かして、素敵な先生になれるように残された大学生活でしっかりと勉強を頑張りたいと思います。

教育実習（東光中学）のクラス写真

講演会だより　英文学科・英文学会共催春季講演会

講演会の報告

アムリットジット・シン先生

「アフリカ系アメリカ人とアジア系アメリカ人の移住と市民権の変遷」

去る2011年6月21日(水)、オハイオ大学教授のアムリットジット・シン先生をお招きして、講演会が開催されました。シン教授はオハイオ大学でラングストン・ヒューズ・プロフェッサーという大変名誉あるポジションにいらっしゃいます。また多数の著作を執筆されており、アメリカの南アジア文学研究会という学会の創立などを通し、アメリカにおけるエスニック文学の発展に大変寄与されていらっしゃる先生です。

このたびは、「アフリカ系アメリカ人とアジア系アメリカ人の移住と市民権の変遷」について講演をしていただきました。講演会場には、学年、専攻を問わず、多くの学生の方にご参加いただき、活発な議論が展開出来ました。

講演では、北米の移民問題を従来の「メルティングポット」論のような理論的枠組みで捉えることは、極めて不適切であるという、シン教授独自の切口に基づき、非移民であるアフリカ系アメリカ人の国内移住や移民であるアジア系アメリカ人双方の市民権の歴史的変遷を比較考察されました。具体的には、1861年の南北戦争から、1896年のプレッシー判決、19世紀の日系人やインド系移民の始まり、1920年代のアフリカ系アメリカ人の文化運動へと続く、数々の歴史的事実やエスニック文学を題材とした比較考察をされました。そのような比較により北米の市民権にまつわる流れの移り変わりが明確になるということ、また様々な人種に対しての法律や社会情勢が如何に相互にからみあっているかについて理解することが必要であることを御指摘いただきました。

この講演は英語で行われましたが、参加した学生の多くが言語の壁に阻まれること無く、注意深くシン教授の語りに耳を傾け、熱心に質問しました。今回の講演会が私達の今後の学習に良き示唆を与えるものとなったのも、シン教授の分かりやすい語り口や中地先生の適切なイントロダクション、参加された学生の向学心に拠るものだと言えます。改めて、シン教授と中地先生、ご参加いただいた学生の皆様に御礼申し上げます。

（英文学科２年　佐々木　良）

講師紹介

アムリットジット・シン（Amritjit　Singh）教授

1945年生まれ、インド共和国出身
現在オハイオ大学英文学科　ラングストン・ヒューズ・プロフェッサー
米国多民族文学会　元会長
専門はアフリカ系アメリカ文学研究、南アジア文学研究、ポストコロニアル思想
ドイツ、フランス、オランダをはじめ世界各国で教鞭をとる

講演会だより　社会学科・地域社会学会共催　前期講演会

2011年度社会学科・地域社会学会共催講演会

綿井健陽先生

「福島第一原発事故とメディア」

都留文科大学社会学科・地域社会学会共催の2011年度前期講演会が、7月29日（金）午後6時より、2号館25WS教室にて、「福島第一原発事故とメディア」と題し、綿井健陽さん（フリージャーナリスト）を講師にお迎えして行われた。今回は講演会形式とディスカッション形式という2部形式で開催され、聞くだけでなく学生も積極的に参加した会となった。

2011年は、3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震が社会科学にとっても大きなテーマとなっている。中でも地震や津波によって被害を受けた原発に関連し、放射能汚染や政府、メディアの在り方についてもう一度考え直さなければならないという課題が出てきた。

綿井さんは震災の翌日現地に入られ、原発周辺でどの程度汚染が進行しているのか、政府の出す情報がいかに危機感に乏しいものであるかを取材され映像におさめている。第1部の最初を「想定外」というキーワードで始められ、チェルノブイリを皮切りに過去に発生した原発関連の事故について言及し「安全神話」など存在しないことや、「想定外」という言い訳めいた発言を我々が許してはいけないという論を展開した。次に現地に入った時のことをご自身が撮影した映像を交えて解説し、韓国のKBSと日本国内での報道のされ方の違い、更にはメディアが情報を伝えると言う事の難しさや受け手がどういった対応を取ればよいのかについて熱く語られた。

第2部では学生から次々に挙げられる質問に丁寧にお答え下さった。質問の内容は①「想定外」を想定することは可能であるか②報道規制は実際にあるのか③国が発表する情報の真偽をどう判断すればよいか④報道や教育機関が原発の影響を強く受ける中で国民の意識を改善するにはどうすればよいか等、原発問題だけにとらわれずメディアについての質問も挙げられ、幅広い意見交換が行われた。なかでも、マスメディアの現場で起きていることは規制ではなくスポンサーを考慮した自粛であるというお話は大変興味深いものであった。

終了時刻を大幅に延長して行われた今回の講演会は、綿井さんご自身も聴衆の熱心さに驚き、喜んでいらっしゃり、講演会に参加した全ての方々にとって良い機会となった。

（地域社会学会事務局次長
社会学科3年　石澤謙輔）

講師紹介

綿井健陽（わたい　たけはる）

1971年大阪府出身。フリージャーナリスト・ドキュメンタリー作家。「アジアプレス・インターナショナル」所属。これまでに、スリランカ民族紛争、パプアニューギニア津波被害、スーダン飢餓などを取材。イラク戦争取材でボーン・上田賞特別賞。

主な作品に、ドキュメンタリー映画『Little Birds～イラク　戦火の家族たち』、著書『イラク戦争－検証と展望』（共著）など。

東日本大震災以降、福島で、原発に最も近い地域や被曝労働者等を継続的に取材。

文大だより

第38回　鶴鷹祭開催

6月25日（土）と26日（日）の2日間、本学「鶴」と高崎経済大学「鷹」において、本学を会場として伝統の鶴鷹祭（総合体育対抗戦）を開催し、スポーツを通じて交流を行いました。「鷹」側はバス14台で総勢547名の学生（9名の教職員を含む）が来訪。この大会は両大学を交互に会場としますが、本学は大会初の3連覇を目指し総勢443名（11名の教職員を含む）の体制を整え『鶴に勝利あり』をキャッチフレーズに、一方の「鷹」側も勝利を目指し『奪還』を掲げ16種目（男女別の種目もあり、実質23競技種目）の対抗戦へ望みました。

鶴鷹祭　開会式

開会式では伝統となっている両校の応援団によるエール交換、本学のモダンダンスサークルによるチアリーディングなどが行われ大会に華を添えました。

来年の勝利を誓う

1日目はバレー、バスケットボール、陸上競技など15競技が行なわれ、本学が9勝とリードしました。2日目にはサッカー、ソフトボール、柔道などが行なわれ8競技中で7敗を喫し、総合では本学の10勝13敗となり、3連覇の夢は達成できませんでした。（これまでの通算戦績は、本学「鶴」の20勝、高崎経済大学「鷹」の16勝、2分け）

両大学の名誉と威信をかけて行なわれた「鶴鷹祭」、今回勝利することはできませんでしたが、その中には様々な感動的なドラマがありました。

第56回　桂川祭開催

11月3日（木）から5日（日）までの3日間にわたり、第56回桂川祭が多くの市民も参加するなか盛大に開催されました。今年のメインテーマは『ＨＥＲＯ』（自分の持つ力を発揮して、きみも誰かのヒーローになろう！）でした。趣向を凝らした開会式でのバルーンリリースから始まり、学内の各団体による模擬店や文化展及び大道芸人によるパフォーマンスやお笑い芸人「フォーリンラブ」によるライブなどが行なわれ会場は大いに盛り上がりました。恒例の「学長と鍋ろう」では、学生の作ってくれた美味しい鍋を食べながら、加藤祐三学長と多くの学生が1時間ほど話し合いを行い、交流を楽しみました。学生にとっては、普段は交流することが少ない学長を身近に感じるとともに、今後の人生において役立つ話を聞くことができる良い機会となりました。

学生による模擬店

伝統芸能の披露も

最終日の閉会式では、多くの来場者の見守るなか、夜空に華やかな花火が打ち上げられ、3日間の幕を閉じました。

準備のため連日遅くまで作業したり、発表の練習をしていた学生、当日来場された方など、今回参加されたすべての方がヒーローでした。

桂川祭を振り返って

第56回桂川祭が11月3日から5日にかけて開催されました。今年は祝日と重なったことから、例年以上の方々にご来場いただきました。多くの方のご協力で無事に桂川祭を終えられたこと、心より御礼申し上げます。

（第56回 桂川祭実行委員会委員長　矢野沙也香）

文大だより

入学時のスクリーニングテスト実施結果

都留文科大学保健センター　学生相談室　箭本佳己

環境が大きく変化する入学期はストレスがかかりやすい時期だといえます。特に新入生は、大学生活という新しい環境に希望を抱きつつも、一方で高校生活と大きく違う授業についていけるかという学業の不安や、友達とうまくやっていけるかといった対人関係の不安、さらに都留文科大学では多くの学生が下宿をしており、大学以外での生活の場でも自分一人で生活していかなければならないという問題にも直面することになります。このような入学時の環境の変化は新入生にとって取り組まなければならない最初の課題となり、それらをどのように乗り越えていくかは、その後の大学生活を良いものにしていく一つのポイントとなるでしょう。

このような現状をもとに本年度より新入生を対象に、入学時の不適応予防を目的としたスクリーニングテストを実施いたしました。調査対象は、大学院生を除く新入生 782 名です。調査には大学生精神保健調査(UPI)を使用しました。UPI は、大学生のメンタルヘルスを総合的にスクリーニングする質問紙です。質問紙の構成は、全体の得点を表す自覚症状得点と、①「頭痛がする」「体がだるい」などからなる主に身体的に不調があることを示す“精神身体的訴え”、②「人に会いたくない」「やる気が出ない」などの項目からなる“抑うつ傾向”、③「他人が信じられない」「気をまわしすぎる」など対人関係での側面を表した“対人不安”、④「繰り返し確かめないと苦しい」「こだわりすぎる」「気持ちが傷つけられやすい」などの項目からなる“強迫傾向・被害関係念慮”という４つの下位項目が設定されています。調査の結果を見てみると、全体の得点を表す自覚症状得点の平均値は 14.55 点（合計 56 点）でした。他大学での同様の調査を見てみると、平均値は 9~16 点の範囲で推移しており、本学も同様の傾向が出たと思われます。次に全体の自覚症状得点と各下位項目の男女差を検討しました。すると、自覚症状得点、精神身体的訴え、抑うつ傾向において女子の方が有意に得点が高いということがわかりました。これは女子学生の方がストレスを抱えやすく、それが身体的な症状に表れたり、気分の落ち込みといった情緒的な部分に反応が出やすいことを表します。次に学科ごとの比較をしてみると、自覚症状得点、対人不安において国文学科の学生が他の学科の学生よりも有意に得点が高いという結果になりました。

では、学生の特徴としてはどのような傾向がみられるのでしょうか。各質問で半数以上の学生（50％以上）が回答した項目を挙げてみます。

- 気疲れる　55.2%
- 決断力がない　52.7%
- なんとなく不安である　64.7%
- ものごとに自信がもてない　50.6%
- 他人の視線が気になる　53.2%

多くの学生が周囲の視線を気にしたり自分に自信を持てていないということがわかります。今回の調査結果から、大半の学生が特に対人関係において周りの雰囲気を大事にする一方で、他人を気にしすぎてしまい自分に自信が持てず気疲れしてしまうといった特徴を持っているということが明らかになったのではないでしょうか。

ここ何年かで大学生が以前と比べて変わってきたという声を耳にすることが増えてきました。今回の調査結果をもとにすると、対人関係の中で自信のなさを背景とした気遣いをする大学生が増えてきたのではないかと考えられると思います。現在都留文科大学では、入学時の人間関係づくりのために学科ごとのオリエンテーションを重点的に行っています。そのような取り組みの中で、対人関係に不安の高い学生がいかに抵抗なく人間関係を構築できる環境を仕組んでいくかということは、新入生の不適応を予防するための重要なポイントとなっていくのではないでしょうか。また学生自身においては、対人関係に不安を持ちながらも自ら主体的に周囲と関わっていく勇気を持つことは、よりよい大学生活への第一歩となっていくような気がします。

文大だより

夏季オープンキャンパス報告

今年の夏季オープンキャンパスは東日本大震災の影響や、計画停電の実施など乗り越えるべき課題もありましたが、７月23日（土）に無事開催することができました。主な内容としては、例年どおり学科別説明会、大学概要説明会（１・２年生向け）、学科別特別講義、キャンパスツアー、個別相談会（大学周辺・下宿情報含む）、学食体験などを実施しました。また、多くの学生にも協力いただき部・サークル活動の紹介、ミニコンサートなど日頃の練習の成果を披露いただき、参加した高校生や保護者を楽しませてくれました。

全国から多くの方が参加

学生による相談会も盛況

参加者は年々増加しており、今年は高校生等が1,052名、保護者等を含めると1,800名を越える方に来校いただき過去最高となりました。県内外の割合でみると６対４の割合で県外からの参加者が多くなっています。

昼休みには各サークルの発表も

昼時には一時混雑する状況もあり、次回以降の改善点などもありましたが、参加された方からは「大学の特色や進路、学ぶことなどがわかった」、「学生さんの態度がとても良く、親切だった。」、「とても熱意ある講義で、学科のことが良く分かった」などの感想が寄せられ好評のうちに終了いたしました。

模擬講義の様子

大名行列への参加

都留市では毎年９月１日に、城下町の秋を彩る「ふるさと時代祭り」を開催しています。主な催し物としては、地元の生出（おいで）神社の秋の例祭として行われてきた「八朔祭」があり、その付祭としての大名行列や屋台巡行などがあります。例年、大名行列には市内の小・中学生や多くの市民とともに、本学学生も参加し、奴（やっこ）姿の赤熊（しゃぐま）、姫様、腰元、馬に乗った殿様、侍など、それぞれの衣装を身につけ壮大な時代絵巻を繰り広げます。今年は、台風12号の影響により残念ながら中止となってしまいましたが、本学学生が、姫様役と腰元役（４名）として選ばれました。

衣装に身を包み記念撮影

文大だより

セント・ノーバート大学（米国）との交換留学プログラムが始まりました

この度、新たにセント・ノーバート大学（ＳＮＣ）との１年間の交換留学プログラムがスタートしました。ＳＮＣはアメリカのウィスコンシン州にある名門私立大学です。ウィスコンシン州といえば、『あらいぐまラスカル』の舞台。北アメリカの自然を満喫できる場所です。この交換留学プログラムの最大の特徴は、正規授業を受講する前の半年間、ＥＳＬを受講（無料）できることで、環境に十分慣れ、英語をブラッシュアップしてから、学業に入ることが可能です。詳しくは国際交流室にお問い合わせ下さい。

セント・ノーバート大学

教員免許状更新講習

今年で３年目となる教員免許状更新講習が、７月３日から 31 日までの土曜日又は日曜日において、全６日間 11 講習が開催されました。今回の実受講者数は 266 名、延べ受講者数では 673 名となり、昨年の実受講者 171 名を大きく上回りました。受講者の中には遠方からの参加もあり、講習内容については、大変好評でした。

■小学校教諭向け：「概念理解を重視する指導」植村憲治教授、「子どもとともに絵本の世界へ」藤本恵准教授、「初等教育段階で行う環境・エネルギー教育」木下邦太朗非常勤講師、「感性を働かせて描いてみよう！動いてみよう！」鳥原正敏教授、酒巻洋一特任教授、麻場一徳教授、「小・中連携を考えた外国語活動のねらいと評価」三浦幸子准教授

■中・高学校教諭向け：「継続可能な社会に向けて―地域と企業・労働の視点から―」田中夏子教授、野畑眞理子教授、「教育関係者が知っておきたい情報教育メディアリテラシー」杉本光司教授、「子どもたちの心とかかわるために」筒井潤子准教授、「小説の読み方　読まれ方」田中実教授、「アフリカ系アメリカ人作家ジェイムズ・アラン・マクファーソンの短編小説を読む」儀部直樹教授

■必須領域：「教育の最新事情」佐藤隆教授、市原学准教授、大島英樹非常勤講師

合唱団４年連続全国大会出場！

本学の合唱団は、10 月２日（日）に横須賀芸術劇場で行なわれた「第 66 回 関東合唱コンクール大学部門」において、みごと金賞第１位を受賞しました。その結果、11 月 19 日（土）に青森県で開催される「第 64 回 全日本合唱コンクール全国大会」への出場が決定いたしました。全国大会では一昨年、昨年に続いての金賞受賞を目指すこととなりますが、今回で４年連続の全国大会出場となります。

４年連続で全国大会出場を決めたメンバー

文大だより

市民公開講座など

今年の地域交流研究センター主催の市民公開講座は、夏休み期間中の８月12日（金）に、市内在住の小学校３・４年生を対象として「Hello ！英語でワクワク」と題し開催いたしました。この講座では英文学科の奥脇奈津美准教授並びのゼミ生が講師となり、英語を使ってコミュニケーションすることの楽しさなどを伝えました。子どもたちは、英語の歌を通して身体でリズムを感じたり、ペアワークでゲームをしたりと、目を輝かせながら楽しんでいました。今年度から全国の公立小学校の５・６年生の外国語活動が必修となったこともあってか、当日は親子で参加される方も多くいました。また、指導役のゼミ生たちにとっても、子どもとのふれあいを通じて小学校での実習になると、双方に喜ばれるものとなりました。

Hello! 英語でワクワクの様子

また、同地域交流研究センターでは、毎年、本学教員と学生スタッフにより大学周辺の自然を案内する自然観察会「森を歩いてみませんか」を開催しており、今年は６月18日（土）と７月16日（土）に開催しました。学生スタッフによるパネルを用いたわかりやすい説明を受けて、参加した市民の皆さんも、改めて身近にある自然を再発見したようです。

英語でゲーム

現職教員教育講座

本学独自の夏季集中講座である「現職教員教育講座」が、山梨県教育センターの教職10年研修事業との併設講座として、７月28日（木）と29日（金）の２日間の日程で開催され、多くの小・中学校の先生方が参加されました。

全体の講座テーマとしては、例年どおり「教師の子ども理解と学習指導」。

子どもの思考や感情・感覚に即した学習のあり方を探り、特に授業において子どもを支える学習指導のあり方を深めていくことを追求した内容となりました。各講師のこれまでの体験談などを交えたケースメソッド、グループ討論などにより、「子どもの好奇心・学ぼうとする意欲を育てる方法」などもお伝えしました。

鶴田先生の講義

例年この講座には、県内はもとより近隣都県からも多くの参加者があり、教育を考える場として期待する声も数多く寄せられています。

田所先生のグループ討論方式の講義

■ 28日：「講座の趣旨について」杉本光司教授、「子ども理解と学習指導」山崎隆夫非常勤講師、「学習意欲を引き出す学びづくり－社会科教育を通して－」田所恭介非常勤講師

■ 29日：「教科に関する研究講座Ⅰ－子どもがわかる授業を作る･国語－」鶴田清司教授、「教科に関する研究講座Ⅱ－子どもがわかる授業を作る・算数－」植村憲治教授

文大だより

平成 23 年度
コンピュータ学生指導員講座（第一回･二回）

下記の日程で、コンピュータ学生指導員による講座を開催いたしました。

第一回　「初心者 Word 講座」　平成 23 年 7 月 7 日（木）・8 日（金）
18:30 ～　2402 教室

第二回　「Photoshop 講座」　平成 23 年 7 月 11 日（月）・12 日（火）
18:30 ～　2402 教室

※参加対象者は学内関係者（学生・教職員等）

初心者 Word 講座は、Word の苦手な人やレポート作成に苦労している人を対象に開催しました。学生・教職員を含め合計 5 名の参加者がありました。講座は、基本操作の説明、練習、実技という順で行い、最後にブラインドタッチの無料ソフトウェアを紹介しました。参加者は学生指導員の説明をよく聞き、熱心に取り組んでいる様子でした。受講後、参加者からは「丁寧な説明で勉強になりとてもよかった。次は Excel 講座をやってほしい」などの感想をいただきました。

初心者 Word 講座の様子

Photoshop 講座は、学生・教職員を含め合計 10 名の参加者がありました。Photoshop Elements6.0 というソフトウェアを利用して自分の好きな画像を編集し、その画像を携帯電話の待ち受けにしてみようという内容でした。途中画像処理に苦労する人や携帯電話に画像がうまく転送できないなどのトラブルがありましたが、全員最後まで行うことが出来ました。画像処理のところでは、完成した画像をお互いに発表しました。参加者からは「とても楽しかった。もっといろいろな講座を開催してほしい」などの感想をいただきました。

Photshop 講座の様子

このように情報センターではコンピュータ学生指導員による講座を定期的に開催しています。次回は 11 月 10 日（木）・11 日（金）に Excel 講座基礎を、11 月 16 日（水）・17 日（木）に Excel 講座応用を、1 月 18 日（水）・19 日（木）に Power Point 講座を開催します。皆様の参加をよろしくお願いいたします。

情報センター担当　関戸章雄

文大だより

秋季オープンキャンパス報告

10月17日（月）から28日（金）まで【水曜日、土曜日、日曜日を除く】の8日間にわたり、秋季オープンキャンパスを開催いたしました。主な内容としては、例年どおり公開授業への参加、個別相談会、キャンパスツアー、学食体験などを実施しました。今年は公開授業へ参加した高校生等が延べ263名、キャンパスツアーへの参加者が124名となりました。県内からの参加者は43名であり、秋季オープンキャンパスでも県外からの参加者の方が多くなっています。

今年のキャンパスツアーでは本学学生がガイド役となり、保護者も含む参加者に対してキャンパス及び施設などを約50分かけて丁寧に説明しました。ツアーの参加者からは、「大学生の先輩の説明がわかりやすかった」、「大学生活も聞けて良かった」、「案内が的確で、大学の様子が良くわかった」など大変好評でした。また、公開授業を受講した学生からも、「魅力的な授業で入学意欲が高まった」、「90分間があっという間に過ぎた」、「大学生の授業での集中力がすごいと感じた」などの感想が寄せられ、本学の雰囲気などを伝えることができたようです。

個別相談会の様子

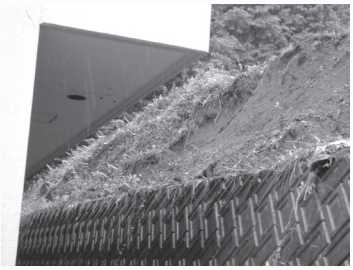
台風12号の影響
学生数名が大学に避難！

8月25日マリアナ諸島の海上で発生した台風12号は、ゆっくりと北上し大型の台風となり、記録的な大雨とともに日本列島を襲いました。その直前にも台風11号が通過し、地盤が緩んでいたこともあり、台風12号が発生した際には県内にも大雨洪水等の警報が発令され、河川の増水による氾濫や土砂災害などが心配されました。

9月2日（金）の夜、学生アパート付近で土砂崩れが発生したとの連絡が大学に入りました。職員は直ちに現場へ急行して学生の安全を確認するとともに、土砂崩れの現場並びにその周辺についても見回り調査を行ないました。この土砂崩れの発生に伴い、その周辺住民に対し避難指示が出され、市内の福祉施設へ避難することとなりました。学生アパートもその避難指示の対象地となり、数名の学生が不安を感じたことから、急遽、本学3号館のホールを臨時避難所として開放する判断をしました。2日の夜は2名の学生が3号館ホールに避難し不安な夜を過ごしました。翌朝、近隣でも土砂崩れの発生が確認され、そこに住む8名の学生が避難してきました。事務職員は2日から5日にかけて、24時間3交代制で不測の事態に備え大学に待機しました。また、避難した学生アパートの大家さんも心配して大学へ駆けつけ、崩れた現場が復旧されるまでの代わりの宿舎の手配などにも配慮くださいました。さらに、周辺住民の方々にも心配いただき、たびたび様子を見に来てくれる方もいました。

その後、台風12号は日本海へ北上し、5日に温帯低気圧へ変わりましたが、改めて自然の偉大さを実感させられました。

避難所（3号館ホール）の様子


台風の影響による土砂崩れ

文大だより

図書館だより　中学生が本学図書館で職場体験

図書整備の講義

図書館では都留市民をはじめとする地域の皆様に、20 年以上もの長きにわたって施設を開放し、利用サービスを行ってまいりました。また、平成 21 年の大学法人化にあたり、大学の中期目標の一つとして地域貢献が挙げられました。図書館としても地域貢献を考える中で、同年より中学生の職場体験学習を受け入れることとなり、3 年目を迎えました。

本年度は都留第一中学校と都留第二中学校の生徒 6 名を本学夏季休暇中(8 月 19 日と 21 日)の 2 日間同時に受け入れました。

一日目は、静かな顔合わせから始まりました。生徒たちは、他校の生徒や、講師の先生、大学の職員に囲まれて緊張していたのでしょうか。総務課長のあいさつから始まり、続いて午前中の体験が始まりました。

情報センター講師の日向先生から大学図書館としてのサービス、資料選定から書架に並ぶまでの図書整備の講義を受け、その後館内見学に移りました。館内見学では、大学図書館ならではの施設整備状況や、本学学生の教育・学習・研究に活かされる図書館環境などをつぶさに学びました。これらの見学に加えて、クイズ形式的に、パソコンを使って書架から目的の図書を見つけ出す「蔵書検索」、その図書を実際にカウンターで貸出・返却する体験や、タブレット型端末の体験へと進み、書架整理体験も行いました。こうして緊張した一日目が終わりました。

館内作業の様子

二日目は、図書館職員とともに、スキャナーで 1 冊ずつ図書のバーコードを読み取る地道な蔵書点検作業を行いました。生徒達は、汗を拭いながら一所懸命に取り組みました。

今回参加した中学生の中には、将来図書館で働きたいと思っていた生徒がいたようです。しかしながら図書館の仕事の中に、蔵書点検のような仕事があると想像したこともなかったのではないでしょうか。図書館の仕事を二日間で体得したとは思いませんが、図書館という施設の中でも色々な部署が有り、1 冊の本が書架に並ぶまでには、多くの人たちが携わっていることを十分に理解したのではないでしょうか。

短い職場体験期間でしたが、生徒の皆さんどうもありがとうございました。

図書館担当　宇佐美千里

前期修了者卒業式

9 月 28 日（水）本部棟 3 階大会議室において、平成 23 年度前期修了卒業証書の授与式が執り行われました。今年は 9 名の学部卒業者がおり、そのうち 6 名が出席しました。

当日は、担当教員の暖かい眼差しに見守られるなか、加藤祐三学長より卒業証書が授与されました。卒業証書の授与後には、卒業生へ向けて学長からの激励の話、担当教員からのお祝いの言葉があり、卒業生並びにその父兄は喜びを噛み締めているようでした。

学長より卒業証書を授与

編集後記

ウィキリークスの「価値」

水野光朗

最近、学生から「インターネットで得られる情報や資料をレポートや卒論に、そのまま引用したり、資料として利用することには問題があるといわれる。ウィキリークスでしか公開されていない公電を利用・引用したいが、どうしたらよいか」と尋ねられた。ウィキリークスとは、未公開の行政文書や社内文書をインターネット上に公開する、いわば、内部情報の暴露サイトであると言われている。各国に駐箚させている大使館や公使館をはじめとする在外公館と本国外務省との間で交わされる公電がインターネット上で公開されることから、外交の民主的統制の見地から歓迎されるべきであるとするプラスの評価がある半面、機密情報の漏えいにほかならず国家の安全を脅かすといったマイナスの評価がなされることもある。

ウィキリークスは、自身のウェブサイトによれば、内部告発を歓迎しており、情報保全や機密保持の観点からは、きわめて問題をはらんでいると言わざるを得ない。しかしながら、真理を明らかにする学術研究の立場に立つのであれば、あらゆる種類の情報を吟味して考察することが求められるため、ウィキリークスが公開する情報には検討する余地があるとも考えられる。

机の前で考えあぐねていても実物を見ないことには議論が始まらない。そこで、ウィキリークスでどのような情報を得ることができるのか、実際に閲覧してみることにした。確かに一般的に公開されているとは必ずしも言い難い資料もあった。しかし実際には、おおよそ秘密とは言えず、秘密に分類されることもない公電が大半であった。例えば、在京米国大使館が米本国国務省に打電した公電のほとんどは、『朝日新聞』、『毎日新聞』、『日本経済新聞』その他の一般的な新聞の毎日の記事と社説の要約・翻訳である。日米関係とはおよそ縁のない、例えば、「夫婦別氏が子どもに与える影響」と題する社説の英訳が打電されたこともある。

ということで、この学生には、ウィキリークスで公開されている公電が全て機密事項を扱っているとは言えないこと、「内部情報の暴露」とか「スクープ」と言われると一見説得力を持つように感じられるかもしれないが、よく読んでみると「内部情報」でもなんでもないことが多く、資料を吟味することが大切であると答えたのである。

今日、インターネットの発達によって、膨大な情報を得ることが可能になった。情報の洪水に溺れることなく、資料を批判的に検討する術を身につけることの重要性がかつてよりも高まっている。本学において担当している「国際関係論」や「Critical Reading」等においても資料を冷静かつ客観的に吟味する方法を講じたいと考えている。

富士急行　都留文科大学前駅待合室。
文大が地域との交流を重要視していることがわかる。

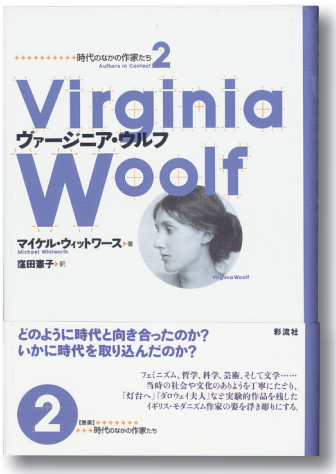
本　ぶんだい堂

子どもと教師が紡ぐ多様なアイデンティティ
カナダの小学生が語るナラティブの世界

田中昌弥／訳
2011 年4月
明石書店　3,000 円＋税

◇たなかよしや　初等教育学科教授

時代のなかの作家たち2
ヴァージニア・ウルフ



窪田憲子／訳
2011 年5月
彩流社　3,800 円＋税

◇くぼたのりこ　英文学科教授

都留文科大学広報委員会　鳥原正敏（委員長）・日向良和（副委員長）・坂田有紀子・楠元六男・鷲　直仁・平林祐子・水野光朗
福田誠治（担当副学長）・小笠原武彦（経営企画室）・関戸章雄（情報センター）・小俣昌寛（総務企画担当）